

白秋アートギャラリー(6)

白秋の音感

薄葉
茂

北原白秋が紡いだ歌詞は、曲に乗る前に韻律を帯びていとも評される。言葉の下地となった写真力に、音に対する好奇心と優れた音感が加わっていたからだと思う。耳から入る情報による想像と、目にする光景が合わさって詩歌となると、独特の詩歌世界が浮かび上がる。昭和九年に刊行された歌集『白南風』には、「こゑ」や「音」を詠んだ作品が数多くある。

日は暑しのほり険しき坂なかは築石垣のこほろぎ
のこゑ

母を思ふ現の声や夜風の硝子戸たたき消ゆる疾足
下り尽す一夜の霜やこの暁をほろんちよちよちよ
と澄む鳥のこゑ

冬山の枯山来ればいさぎよし甲にひびきて何か研
る音

冬の田の門田の泥にふる雨のこの夜氷雨の音立て
にける

四十歳代の白秋は自然界に存在する虫や鳥の「こゑ」や風、雨などの「音」に親しんだ。車や電子機器など人工的な音が日常生活に氾濫する現代とは違って、「こゑ」や「音」に、心静かに耳を澄ませることができた白秋の時代。何と贅沢なことだろう。五首それぞれに表現された「こゑ」や「音」からは、激しさや鋭さ、静寂さ、そして温度も伝わり、写実の魅力が詰まっている。

「こゑ」や「音」に心を揺さぶられ、感受したものを情景の中に織り込み歌にすることで、詩歌世界を創出した白秋。一首一首のイメージを膨らませれば詩や歌詞になり、その逆もあり得る。まさに自由自在の創作者である。

白秋は五十歳を過ぎて目を病んだ。東京・駿河台の杏雲堂病院に入院した際に、昭和十五年刊行の歌集『黒檜』に収められた、音感の粹とも言える一首を詠んだ。

ニコライ堂この夜揺りかへり鳴る鐘の大ききあり小
さきあり小さきあり大ききあり

鐘の音を大、小、大、小ではなく、大、小、小、大としているところに私は惹かれる。特別な「この夜」(聖夜)に響く鐘の音が駿河台の街や天に広がっていくかのようだ。下句の字余りによる長い一首は、鐘がゆつくり大きく揺りかえる様を想像させる。寂しいだけの聖夜ではないのだ。

白秋の優れたこの表現を賛美歌とともに味わいたいと思う。病床で研ぎ澄まされた音感が成せる技だろう。